

岐阜県の「地歌舞伎」について

A Study of the Word, “Jikabuki” By Gifu

蒲池卓巳¹・南本有紀

Takumi GAMAIKE¹, Yuki MINAMIMOTO

¹ 地芝居ポータルサイト代表

要旨

2019年は「地歌舞伎」という言葉が公に用いられるようになって20年目の節目の年である。この用語については、歴史用語としての古い用例が見当たらないとして、不適切・不正確な用語とされ、研究者の間では批判的に見られている。しかし、人形浄瑠璃（人形芝居）等を含む、素人役者による演劇を指す「地芝居」における、特に素人歌舞伎のみを表す言葉として、非常にわかりやすく、キャッチーであることは否めないばかりか、「地歌舞伎」という名称で打ち出すことによって岐阜県の現在の状況があるともいえる。

本論では、「地歌舞伎」の平成時代を取り上げ、岐阜県の「地歌舞伎」を概括する。

はじめに 「地歌舞伎」とは何か

「地歌舞伎」という言葉が岐阜県で知られるようになったのはいつからだろうか。他の地域では「地芝居」「農村歌舞伎」と呼ばれている民俗芸能を岐阜県では「地歌舞伎」として親しまれているのはなぜか。これらの問いに対して十分な説明がなされていないのが現状である。そこで本論では、「地歌舞伎」という用語に対する見解と現在に至るまでの動向を取り上げ、岐阜県の地歌舞伎について概括する。

『美濃の地歌舞伎』で小栗克介（美濃歌舞伎博物館初代館長）が「地歌舞伎」を明記したことが、公に知られていくきっかけである。¹小栗は次のように「地歌舞伎」を定義している。

「本来の役者ではない、一般農民たちによって演じられる、人形浄瑠璃や狂言、歌舞伎芝居などを総称して地芝居といいます。特に歌舞伎については地歌舞伎と呼ばれ、江戸期より伝統的に受け継がれ、しかも年中行事に行われるものをいいます。」

小栗はこのように「地歌舞伎」を定義した上で、地歌舞伎の保存と伝承に力を注いでいった。彼の強い思いから「地歌舞伎」という用語は20年をかけて岐阜県全域へ広がっていく。その一方で、この用語は研究者たちの間では歴史用語としての古い用例が見当たらないとして不適切・不正確な用語とされた。研究者たちが批判的に捉えられたことが影響し、岐阜県以外の地域では「地歌舞伎」という用語は使われていない。

岐阜県で「地歌舞伎」として呼ばれる素人歌舞伎はもと「地芝居」「農村歌舞伎」という名称で全国の様々

な場所に存在している。²地芝居とは、地域の住民たちが自分たちの楽しみのために自分たちの手によって芝居を行う民俗芸能である。その地域の年に一度の祭礼の余興として行われることが多かった。歌舞伎以外に村芝居（剣劇、時代劇等）、人形芝居（人形浄瑠璃）等も実は地芝居に含まれる。地芝居の対義語として買い芝居・請け芝居がある。旅役者たちによる巡業公演を村人たちが依頼する形である。地歌舞伎（地芝居）と買い芝居の両方が岐阜県では盛んだったことは現存する芝居小屋や農村舞台の数、現在の地歌舞伎を支える担い手たちの背景などからうかがい知れる。^{3,4}

岐阜県で地歌舞伎が盛んだったのはなぜだろうか。定説はないが、大きく3つの理由が挙げられるだろう。

- ① 幕府の政治的配慮として民をなだめる「撫民政策」があったためである。美濃地方は地芝居に対する禁制が緩やかだった。
- ② 材木が豊富な山間部であったこと。巨大な芝居小屋を建てやすい環境であった。
- ③ 中山道などの街道の往来が盛んであったこと。主街道と脇街道で往来が盛んであるため、文化が行き交う機会が豊かであった。

地域に芸能が好きな人材が多かったことで、往来する芸能集団との接点を持ちやすい環境を作り上げていたのではないか。また、旅役者の中で一時的滞在から移住に至る人もいて、村人たちに芝居を教える振付師となっていた話も数多く残っている。

1 地歌舞伎にとって「平成」の30年間とは

小栗克介から始まった地歌舞伎は小栗のご息女である小栗幸江に受け継がれると同時に、岐阜県にある地歌舞伎保存会の人々にも浸透していった。そして地歌舞伎は2019年で20年という節目となる。平成という時代における地歌舞伎（地芝居）を象徴する2つの項目がある。ひとつは平成の市町村合併によって地歌舞伎保存会の環境の変化であり、ふたつには子ども歌舞伎の隆盛である。

平成の市町村合併の成果については賛否両論あると思われるが、合併前に比べて活動を広く知ってもらったことや行政からのバックアップを受ける機会が増えたという保存会もあることを述べておく。

子ども歌舞伎の隆盛については、子どもとその家族を対象とした歌舞伎教室を実施することが多くなった。これは保存会が将来の担い手育成、地歌舞伎の存在を知ってもらう目的のためである。しかし、子ども歌舞伎が昔に比べて流行っていたとしても、子ども歌舞伎出身で成人後に地歌舞伎に加わるのは数人だと保存会関係者は言う。

こうした時代の変化が岐阜の地歌舞伎にも何らかの影響を与えているはずである。つまり小栗克介が前面に打ち出した地歌舞伎は時代の変遷によって意味合いが変化してきたのではないか。例えば後述する「ぎふの宝もの」認定や保存会の枠を超えた活動などがある。そうした動向は、小栗が定義した「地歌舞伎」にはなかった要素が加わったことを意味する。

2 岐阜の宝もの「地歌舞伎」

江戸期の歌舞伎を保存するという地歌舞伎の活動が単なる保存活動から大きく変化していった。その変化とは地歌舞伎の観光化である。例えば、清流の国プラザ（岐阜市）で「清流の国ぎふの地歌舞伎公演」が年に複数回おこなわれる。この公演を通して、芝居小屋を持たない保存会を多くの観客に知ってもらう貴重な機会となっている。また、2018年には「ジャポニズム2018」がフランスで行われ、「地歌舞伎」は「Jikabuki」として参加し、世界に発信する機会を得た。これは地歌舞伎という岐阜県のオリジナルブランドだからこそできたことであり、海外の多くの人たちに岐阜の地歌舞伎として認められた。このことによって地歌舞伎の「活用」はさらに強まっていく。

地歌舞伎の観光化は自治体のみでの取り組みばかりでない。「ジカブキプロジェクト」について紹介する。ジカブキプロジェクトは保存会有志が中心となった任意団体で

ある。活動は行政からの委託がほとんどで、①外国人観光客向けの地歌舞伎ミニ公演、②地歌舞伎バスツアー、③外国人向け岐阜県のプロモーションが主な事業内容である。

これらの事業をひとつずつ見ていこう。

① 外国人観光客向けミニ公演「馬籠・はざま歌舞伎」

この事業は岐阜県の馬籠に来る外国人観光客向けのミニ公演であり、地歌舞伎レクチャー30分・ミニ公演30分・役者たちとの写真撮影のセットで約1時間コースとなっている。公演の演目は『白波五人男 稲瀬川勢揃いの場』と『菅原伝授手習鑑 車引きの場』、三味線などの音楽は基本的に録音のものを使用しているが、時には生演奏を行なっている。2019年度には『寿曾我対面』という演目も追加予定である。参加する観光客にはレクチャーの時間に大向こうやおひねりなどを説明する。ミニ公演を継続していく中で、公演場所の馬籠の人たちも役者に扮して参加するようになった。この企画では役者のみならず、裏方の技術力アップも目的の一つにある。例えば、着付けや化粧も自分たちで出来るようになってきている。衣裳は東濃歌舞伎中津川保存会、鬘はジカブキプロジェクトが管理している。どの保存会でも白波五人男なら着の身着のまま参加できることで、敷居を低くし、関わりやすいという成果があった。

② 「地歌舞伎バスツアー」

この事業は、愛知県名古屋から出発する地歌舞伎公演日帰りツアーである。民間の旅行会社との共同企画で行われている。当初は東濃地方における他の観光地を含めたコースを企画していたが、アンケートから「もっと地歌舞伎が観たい」という声が多くあったため1日観劇ツアーとなった。この企画の最も注目する点はガイドの魅力だろう。プロの歌舞伎解説者がガイドを務める時もあるが、その他に地歌舞伎保存会で役者をしている人にガイドを頼んでいる。彼らだからこそ話せる地歌舞伎の裏話や失敗話が聞けるので参加者たちにとって大変楽しんでもらっているようだ。この企画は大変好評で、参加者の3分の2はリピーターが占めている。回を重ねるごとに参加者が増えており、地歌舞伎を知ってもらう大きな効果を上げている。

③ 海外公演

海外公演は「ジャポニズム2018」に限らず、岐阜県のプロモーションで海外へ同行する機会が年々増えている。あくまでも「岐阜の宝もの」としての地歌舞伎を周知してもらうために、先述したミニ公演とは違う工夫

が行われている。例えば白波五人男をイベントのスケジュールなど状況に合わせて五人ではなく三人で行ったりする。宣伝の場として地歌舞伎を見てもらうことは海外でも好評を得ている。こうした活動は地歌舞伎の活動に直接的なメリットがあるわけではない。しかし、関わる役者たちの自信とスキルアップにつながる機会になりうる。

ジカブキプロジェクトの3つの事業を紹介した。地歌舞伎が2010年に「岐阜の宝もの」⁵に認定されたことを契機に地歌舞伎の観光化は大きく動き出した。この大きな変化によって観光に関わる人々に地歌舞伎を知ってもらう機会を得たのだ。つまり、文化面での保存とは異なる新しい担い手が地歌舞伎に現れたといえる。

岐阜県の地歌舞伎保存会はこれから徐々に自主公演が困難な状況に陥る可能性が懸念される。そのため、お互いにサポートしあう関係性を構築していくことがジカブキプロジェクトの今後の目標になっていく。その一つに保存会間で担い手が交流していくことである。このサポートネットワークは岐阜県の地歌舞伎保存会ならどこでも関われる仕組みづくりにしていきたいそうだ。上述し



ジカブキプロジェクト

た3つの事業もヒトとモノが交流し合えるサポートネットワーク構築のプロセスに位置付けられるだろう。

3 地歌舞伎の担い手たち

地歌舞伎の活用に脚光が集まる中で、保存会の担い手たちは地歌舞伎の存続を常に考えている。それはジカブキプロジェクトの目標にも表れている。地歌舞伎が小栗克介によって公に打ち出されて20年経った現在、「地歌舞伎」は変わったのだろうか。一つの参考としてジカブキプロジェクトが定義する「地歌舞伎」を見てみよう。

「江戸や大阪から公演に来るプロの役者（旅役者）に憧れた地方の人々は、旅役者に芝居を習い、やがて自分たちで芝居小屋や神社の祭礼時に演じ、楽しむようになりました。土地の素人が演じる地芝居をこの地方の人々は地歌舞伎と呼び、江戸時代から伝えられてきた物語や振付、衣裳を大切に受け継いでいます。」⁶

小栗が定義する「地歌舞伎」と大きな違いはない。あえて違いを見つけるのならば、地歌舞伎を支えることになる旅役者に触れている点と江戸時代から残っている演

目、振付、衣裳の継承を明言している点だろう。

小栗は「地歌舞伎」を提唱することによって何を残したかったのか。芝居小屋や衣裳なども挙げられやすいが、岐阜県の地歌舞伎には大歌舞伎で行われなくなった演目や型が残っている。地歌舞伎（地芝居）は地域の他の芸能に影響を受け、大歌舞伎とは全くちがう歌舞伎の形になっている事例も他の地方で残っている。その土地の文化や民俗に影響を受けて歌舞伎という芸能の形が変化していくことも大歌舞伎にはない地歌舞伎（地芝居）が持つ魅力といえる。小栗は有形だけでなく、そういった地歌舞伎が持つ無形の文化を何よりも残していきたいのではないだろうか。

地歌舞伎はそうした魅力を保持しながらも大歌舞伎にも通ずる歌舞伎という芝居を成立させなければいけない。その重要な担い手として、かつて旅役者などを出自とする振付師の存在がある。次項では岐阜の地歌舞伎を支えている振付師たちの中で松本団女、中村高女、市川福升の3人を簡略ではあるが見ていく。

松本団女

本論で松本団女を取り上げる際には、父親である松本団升にも触れなければいけない。二代目松本団升は小栗克介との関係があったためである。小栗は『美濃の地歌舞伎』において振付師の松本団升を紹介し、大歌舞伎では失われていた歌舞伎の演目と型が地歌舞伎に残っていると伝えた。また松本団升を大歌舞伎の三代目市川猿之助（現・猿翁）に引き合わせてもいる。こうした背景をもつ松本団升の後継者である松本団女を含めた松本団升一家は、岐阜の地歌舞伎にとって第一に押さえておく担い手だと思う。

松本団女の本名は安藤美雪。恵那市出身の昭和32年生まれである。二代目松本団升の次女として生まれ、団升没後に地歌舞伎の振付師として活躍している。地歌舞伎に残る独自の演目を団升から受け継いでいる。振付師として関わっている保存会は、山岡、加子母、村国座、東白川、明智町、串原の6団体である。

また杵屋勘輪咲として下座音楽を務めている。自身の振り付けで関わっていない保存会の公演にも下座音楽として携わっているので、一年のほとんどを地歌舞伎に関わっているといっていいたいだろう。裏方として地歌舞伎を支えているのは松本団女だけではない。松本団升の一家全員が



松本団女師匠（右から2人目）・中村高女師匠（右から3人目）

岐阜の地歌舞伎を裏方として支えている。現在は 10 人が下座音楽、顔師（化粧）、振付、義太夫、三味線、衣裳、床山と大道具以外の裏方のいずれかを担っている。

中村高女

本名は市川恵美子。昭和 6 年に恵那市で生まれる。二代目中村津多七、先代中村高女の養女として育ち、6 歳から子役として中村津多七の劇団で旅廻りを経験した。地芝居をしていた三代目中村津多七の妻となり、共に東濃地方で振付師として活動していくことになる。恵那市重要無形文化財保持者。振付師として関わっている保存会は東濃歌舞伎中津川、常盤座、蜷川、東座、東野、恵那の 6 団体である。

本名の市川恵美子として中津川衣裳部も取り仕切っていることが中村高女の特徴である。中津川衣裳部の衣裳は恵那市で貸衣裳屋を務めていた伊藤家が廃業したために譲り受けた衣裳である。衣裳の正確な所蔵数は把握できていないが、地歌舞伎で行われる主な演目は全て揃っている。先述の松本団女の下座音楽と同じように、中村高女は自身以外の振付師が教える保存会にも中津川衣裳部として関わっている。

加賀屋（中村高女と中村津多七の屋号）には現在の大歌舞伎にはない、もしくは大歌舞伎では久しく行われていない演目がある。それらの演目の台本は残っているので東濃歌舞伎中津川保存会を中心に復活上演に取り組んでいる。台本はあるが振付は中村高女の頭の中だけにあるため、ひとつひとつ確認しながら作っている。現在 6 作を復活させた。⁷

市川福升

本名は粥川淑子。昭和 5 年生まれ、愛知県豊川出身である。結婚後、岐阜県下呂市に移り住んでいたところ、飛騨の人たちから地歌舞伎の振付を依頼されたことをきっかけに振付師として活動する。現在、振付師として関わっている保存会は白雲座、鳳凰座、佐見歌舞伎の 3 団体である。

市川福升について特筆すべきことは市川少女歌舞伎出身だろう。市川少女歌舞伎とは、旅芝居の役者であった市川升十郎の指導の元、愛知県豊川中心に集まった少女たちによって行われた歌舞伎一座である。活動期間は 1948 年～1962 年である。（1960～1962 年までは市川女優座と改称）。市川少女歌舞伎は、大歌舞伎の成田屋宗家の庇護を受け、二代目松緑など名優から指導を受けつつ、全国的に活躍する。市川福升はその市川少女歌舞伎

の幹部女優であり、主に立役として活躍する。藤間松鳳として日本舞踊家元でもある。

市川福升が指導

する保存会は 3 団体と少ないが、それらの保存会との関係は深い。白雲座歌舞伎保存会を中心に市川福升の振り付けを継承していこうと他の保存会と共に活動に取り組んでいる。

岐阜県でも重要な 3 人の振付師を紹介したが、彼女たちを含めて現在の岐阜県で活動している振付師は 10 人いる。⁸彼女たちのように旅役者の流れを汲んではないが歌舞伎に熱心で詳しい地元の人が振付師となる事例も岐阜県には昔からあった。

曳山子ども歌舞伎の振付師

これまで述べてきた振付師たちは長い年月をかけて保存会との関係を構築してきた。そのため、現在では切っても切れない関係でもあり、いくつかの保存会では振付師がもつ演目や型を継承していこうと取り組んでいる。岐阜県にはそうした関係とは異なる振付師との関係で地歌舞伎を行なっている保存会もある。それは曳山子ども歌舞伎に携わる保存会である。岐阜県の西濃地方に位置する垂井・掛斐川地域において曳山の上で子ども歌舞伎は行われている。

ここでは垂井の曳山祭りにおける振付師について述べたい。垂井の曳山祭は、毎年 5 月に行われている。3 基の曳山が出され、曳山の上で子ども歌舞伎が奉納される。これは滋賀県長浜市の曳山祭を中心に岐阜県から北陸地方にかけて広い地域で行われている子ども歌舞伎の形である。

2018 年時の振付師は明治大学で歌舞伎研究会に所属していた一般人、長浜の三役修業塾⁹の出身者、松竹大歌舞伎の関係者の 3 人である。振付師との付き合いは東濃地方に比べて浅く、時々、事情で振付師の変更がある。曳山祭では祭礼が無事にできることが最重要である。そのため、振付師という役は地歌舞伎に欠かせない担い手ではあるが、他の地域に比べて比較的代替可能である。これは岐阜県の地歌舞伎は振付師が必ずしも絶対的な存在ではない地域も含んでいるという事例である。



おわりに 地歌舞伎を継承していくために

岐阜県の地歌舞伎は過渡期にある。上述した3人の振付師のうち2人は昭和一桁世代の80～90代であり、地歌舞伎に携われなくなる時もそう遠くない。そのことは保存会の担い手たちが最も認識しているだろう。「地歌舞伎」というブランドイメージを確立し、岐阜の宝ものとして脚光を浴びつつある時であっても、この大きな課題はもう間もなく訪れる。

最近では新しい30～40代の若い振付師も現れてきている。小栗克介やジカブキプロジェクトが定義した「地歌舞伎」に照らしながら、こうした新しい流れが地歌舞伎にどのような影響をもたらすのか慎重に見極めていきたい。

今、必要なことは様々な背景を持った人たちが担い手として地歌舞伎に携わることである。

2011年の東日本大震災以降、民俗芸能にも変化があった。分断されたコミュニティの再生として東北の民俗芸

能の重要性が注目されるようになったのだ。つまり、人との出会いの媒介として民俗芸能は重要視されてきた。東北の民俗芸能に様々なジャンルの人たちが関わり始めた8年間だった。

こうした民俗芸能の変化は地歌舞伎のこれからも当てはまるのではないか。観光化によって世界へ発信する「地歌舞伎 Jikabuki」を通して、地歌舞伎の担い手たちは新しいネットワークづくりに向かっている。それは保存会の役者や裏方にとどまらないと思う。当日の手伝い、大道具の組み立て・撤去ボランティアなど関わり方はたくさんある。今後は観光のような新しいアプローチから今までになかった新しい関わり方を見つけていく必要がある。まずは「岐阜の宝もの」として地歌舞伎を一人でも多くの人に知ってもらおうことだ。大歌舞伎は日本のものだが、地歌舞伎は岐阜県のものである。胸を張って「地歌舞伎 Jikabuki」を伝えていってもらいたい。

参考文献

岐阜県教育委員会『岐阜県の農村舞台 昭和46年度岐阜県農村舞台緊急調査報告』岐阜県教育委員会 1972

小栗克介編『美濃の地歌舞伎』岐阜新聞社出版局 1999

日比野光敏『地歌舞伎に生きる-中村津多七・高女夫婦振付師』岐阜新聞社 2000

安田徳子『地芝居の演目：美濃・三河地域の場合』岐阜聖徳学園大学国語国文学 2004

安田文吉・安田徳子『ひだ・みの地芝居の魅力』岐阜新聞社 2009

文化庁『「全国の地芝居（地歌舞伎）」調査報告書』文化庁文化財部伝統文化課 2015

館野太郎編『市川福升』日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイブ 2015

<https://oraltheatrehistory.org/archives/190>

¹ 「地歌舞伎」という用語は小栗克介が紹介する以前からあった。池田彌三郎が1959年に歳時記で「地歌舞伎」と記していることは分かっている。富安風生編、1959、『俳句歳時記（全五巻）秋の部』、平凡社を参照。

² 全国で236団体の地芝居保存会がある（活動中218団体、中止30団体）。「全国の地芝居（地歌舞伎）」調査報告書を参照

³ 天和3年（1683）の買ひ芝居の資料や貞享4年（1687）には下呂市にある久津八幡宮（萩原町上呂）の祭礼記録で地芝居（村芝居）が奉納された資料が残っている。地芝居の資料は全国で最古の地芝居資料である。

⁴ 地歌舞伎団体と芝居小屋については、32の地歌舞伎団体が活動し、そのうち地歌舞伎保存会は29団体である（2019年現在）。また芝居小屋の数は11棟。最も古いのは明治10年（1877）創建の「村国座」（各務原市）である。農村舞台の数は現存139棟、廃絶105棟、合計244棟。アンケート回答も含めると270棟以上あるのではないかと述べられている。『岐阜県の農村舞台 昭和46年度岐阜県農村舞台緊急調査報告』参照。

⁵ 岐阜県では平成19年7月に「みんなでつくろう観光王国飛騨・美濃条例」を制定。県民の皆さんと飛騨・美濃じまん運動を推進し、観光王国岐阜の実現を目指しています。（中略）岐阜の宝もの認定プロジェクトは、飛騨・美濃じまん運動を推進するための主要プロジェクトの一つです。（『岐阜の宝物認定プロジェクトとは』一部引用参照）

⁶ ジカブキプロジェクトHP「地歌舞伎とは」より一部引用。

⁷ 復活した6演目は、『横田元綱勇戦記』『増補八百屋献立 新鞆八百屋』『天下知桔梗旗揚』『寿門松』『染模様妹背門松 蔵前』『茜染野中隠井』。これから復活させる演目は次の10演目ある。『陸奥乃白萩老後政岡』『忠臣二度目清書』『慶安太平記 丸橋忠也堀端』『傾城曾我揚巻助六』『清水一角』『土屋主税寶井其角寓居』『土屋主税土屋邸奥座敷』『源平魁躑躅扇屋御影堂』『源平魁躑躅五条橋組討』『刈萱桑門筑紫いえづと（車へんに栄）』。

⁸ 「全国の地芝居（地歌舞伎）」調査報告書を参照。

⁹ 滋賀県長浜市の「三役修業塾は平成二年に開講した、曳山祭で振付・太夫・三味線の三役を担う人材を養成する塾です。」長浜曳山博物館HPより引用参照。